

大航海時代の外国語学習

——メキシコのフランシスコ会宣教師たちの場合——

堀 田 英 夫

Aprendizaje de lenguas extranjeras en la Era de los Descubrimientos

—el caso de los misioneros franciscanos en México—

HOTTA Hideo

1. はじめに

大航海時代（15世紀から17世紀前半）において、今まで交流のなかった異なる言語を話す者同士が接触し、交流することが一段と拡大した。アフリカや南北アメリカ、アジアへ進出したヨーロッパ人の中に、キリスト教（カトリック）を宣教する使命感にかられた宣教師たちがいた。宣教師たちは、現地の住民をキリスト教に改宗させるためにはことばでコミュニケーションする必要があった。そのため、現地の言語を習得し、また後輩がそれを効率よく習得できるようにと、辞書、文法書、それに現地語による教義書や懺悔録を作成した。

本稿では、メキシコでの初期の宣教にたずさわったフランシスコ会のペドロ・デ・ガンテ師、12人の修道士、それにアロンソ・デ・モリーナ師が、どのように現地の言語を学習したのかをできる限り当時の記録から見ていきたい¹⁾。

2. 征服戦争の時

コルテスによるアステカ王国の征服戦争には、従軍司祭がいた。彼らが現地の人たちへの宣教に対し、どのような働きをしたのかについては記録がほとんどない（Kobayashi, 1974: p. 186）。現地の言語を学んだかどうか

も不明である。彼らはコルテスらスペイン人のためのミサをあげるなどの務めをしていた。ベルナルド・ディーアス・デル・カスティージョの『メキシコ征服記』に、従軍司祭の一人がメシカ人相手にキリスト教を説いたことが次のように書かれている。ベラクルス近くに上陸したコルテス一行のところに、モンテスマ王からの使者としてやって来たテンディーレらを前に、コルテスがメルセス会の修道士に、“*les damos a entender con nuestras lenguas las cosas tocantes a nuestra fe.*” (Cap. XL. p. 68) 「通訳を使って我等の聖なる信仰のなんたるかを彼等に説いて聞かせましょう」(小林訳 p. 150) と言っている。コルテスの通訳、おそらく、ヘロニモ・デ・アギラールとマリンチェを使って、現地の人たちにキリスト教の教えを説いたのであろう。

だが、モンテスマ王からの使者たちにキリスト教の教義を理解してもらうことは難しかったであろう。日本におけるキリスト教宣教において、イルマン、エケレジヤ、キリシタン、クルス、コレジヨ、セミナリヨ、デウスのようなキリスト教関係の用語の多くは、ポルトガル語やラテン語のまま日本語の中で使うことによって、誤解されないような配慮がされた。キリスト教の教会を「神社」や「寺」、デウスを「大日」や「仏」と訳しては、誤解されるからである。メキシコのナワトル語でも同じことが言える。アロンソ・デ・モリーナ師 (Fray Alonso de Molina) のスペイン語ナワトル語の語彙集 (1571) で、スペイン語見出しの後に “*lo mismo*” [同じ]、“*idem*” [同前] とある語は、“*los naturales no tienen otro vocablo propio en su lengua, sino que usan del mismo que nosotros tenemos ala letra*” (aviso octavo. León-Portilla. 1970: LIII) [現地の人たちは自分たちの言語で独自の語を持っていない、我々が持っている同じ語 (スペイン語) をそのまま使っている。] とある。ナワトル語に置き換えるのが適切でなく、理解してもらうには説明が必要な語である。いくつか例をあげる。

“*Crucifixo. lo mismo. l. cruztitech mamaçouhticac.*”²⁾ [キリスト磔の十字架, 同じ.]

“*Cruz. lo mismo. vel. quauitl nepaniuhloc. Et sic de alijs.*” [十字架, 同じ.]

“*Christiano. lo mismo. vel. itetzinco poui yn totecuiyo Iesu christo.*” [キリスト教徒, 同じ.]

“*Dios. lo mismo. vel. teutl. teotl.*” [神, 同じ.]

“*Padre sancto. lo mismo. vel. vei teopixcatlatoani.*” [聖なる父, 同じ.]

“Yglesia. lo mismo. *vel. teopan. teopantli. teocalli. teopan calli.*”[教会. 同じ.]

例えば、Dios に、*teotl* (神) の語が添えられている。これはアステカの宗教における神を意味する語なので、この語を使ったとしたら、キリスト教の神も多神教の中の一柱の神ととられてしまうので、キリスト教の説明には使えない。ナワトル語話者へのキリスト教宣教の実践の中で、これらの語は、ナワトル語に置き換えたのでは適切に理解されないで、スペイン語のままの語形で、意味概念を説明したことが定着したのだと考えられる。コルテスの通訳が、征服戦争の初期にそのような説明ができたとは考えにくい。

コルテスらに抵抗していたクアウテモクが1521年8月13日にスペイン人側に捕らえられ、アステカ王国側の組織的抵抗が終わった。やがてメキシコがスペイン王室の支配する地となり、キリスト教化もスペイン王室の認可のもとで進められることとなった。スペイン王カルロス I 世により、メキシコでの布教の要請を受け、3人のフランドル³⁾人のフランシスコ会修道士が1522年4月にフランドルのヘント (*Gent*. スペイン語名 *Gante*) の修道院を出た。ファン・デ・テクト (Juan de Tecto o de Toict; Johan Dekkers)、ファン・デ・アオラ (Juan de Aora o Ayora; Johan Van der Auwera)、ペドロ・デ・ガンテ (Pedro de Gante, Pedro de Mura; Peter Van der Moere, de Moor, o de Muer) の3人である。彼等は、カルロス I 世の艦隊で1522年7月22日にスペインのサンタンデルに上陸した。翌年1523年5月10日にメキシコに向けスペインを出港し、1523年8月13日にメキシコ・ベラクルスに到着した⁴⁾。

3. ペドロ・デ・ガンテ師

ペドロ・デ・ガンテは、カルロス I 世と同じ王家の血筋として、フランドルのヘント市の近くで生まれた (Torre Villar. 1974: p. 9. notas 7 y 9)。ヘロニモ・デ・メンディエタ師 (Fray Gerónimo de Mendieta) の1570年11月20日の日付のあるメキシコ在住のフランシスコ会士名簿の原稿 (Memorial. Assadourian. 1988. 所収) に、ペドロ・デ・ガンテが90歳とある (p. 405) ので、生まれた年は、1480年ごろである。また、フランシスコ会の文書に、次のような記述がある：

“desta escuela tiene cargo Fr. Pedro de Gante, el cual vino á esta tierra habrá

cuarenta y seis años” ... “y este fué el primero que enseñó á los indios á cantar y la música que ahora tañen, y les ha hecho aprender el pintar y otros oficios en que se igualan y exceden á los españoles, y ha perseverado en instruirlos y aprovecharlos hasta el dia de hoy, que vive de edad de noventa años.” (Relación particular y descripción. *Códice Franciscano*. 1889: p. 6) [この学校はペドロ・デ・ガンテ師が担当している。彼がこの地に来たのは46年前であろう。] … [彼はインディオたちに歌うことや彼らが今演奏する音楽を教えた最初の者で、彼らに、スペイン人と同じ、あるいは上回るような、絵を描くことやその他の手仕事を習わせた。そして彼らを教え、上達させることを今日に至るまで根気よく続けてきて、90歳の年齢である。]

メキシコに来た1523年が、46年前だろうとあるので、この文書の書かれた年は、1569年と推定でき、この時90歳とすると、生まれた年は、1479年となる⁵⁾。

カルロス I 世と同じく、スペイン語は母語ではなかった⁶⁾。ペドロ・デ・ガンテ自身が、1529年に故郷の修道院のフランシスコ会士らへの手紙⁷⁾にメキシコから次のように書いている。

“Mucho había deseado escribiros desde ésta tierra en que ahora vivimos; pero tiempo y memoria me faltan. Grande estorbo fue también haber olvidado del todo mi lengua nativa; y tanto, que no acierto a escribiros en ella como deseaba. Si me valiera de la lengua de estos naturales no me entenderíais. Mas he aprendido algo de la castellana, en la cual, como pudiere, os diré esto poco” [今私たちが住んでいるこの土地からあなたたちに手紙を書きたいと大いに思っていました。しかし時間と記憶が私には不足していました。母語をまったく忘れてしまったということも大いなる妨げでした。望むようには母語であなたたちに的確に書けないのです。この地の人たちの言語で書いたとしてもあなたたちに理解してもらえないでしょう。しかしカスティリャ語をいくらか習得したので、この言語で、可能な限り、このことを少しばかりあなたたちにお話ししましょう。]

ペドロ・デ・ガンテが、スペイン語をいつ、どこで習得したのかはわからない⁸⁾。若いときは宮廷で過ごし、ラテン語やギリシャ語などを含む高度な教育を受けたと考えられている (Kobayashi. 1974: pp. 229-232) ので、その教育の中にスペイン語が含まれていたかもしれない。そうでないならば、ヘント市の修道院を出てスペインに来た1522年からスペイン語を学

び始めたと考えられる。1480年の生まれとすると、42歳ぐらいの年齢で始めたことになる。ナワトル語の習得は、1523年のメキシコ到着後であるので、43歳ごろから学習を始めた。

彼は、最初はテスココ (Tezcucuo) において、その後、メキシコ市のサン・フランシスコ教会・修道院に附置されたサン・ホセ礼拝堂に長く住み、現地の子供たちにキリスト教の教義だけでなく、教会で歌う歌や礼拝堂の中などに飾る絵を描くこと、それに、スペイン式の手工芸や技術も教えた (Mendieta. 1971: Lib. IV. Cap. XIII. p. 408, Lib. V. Cap. XVIII. p. 608)。

ことばがわからないのに、どのように教育したのだろうか。歌の教育について、同僚が彼と一緒に起こった歌の教育について、次のような記述がある：

“El primero que les enseñó el canto, juntamente con Fr. Pedro de Gante, fue un venerable sacerdote viejo, llamado Fr. Juan Caro, que bien barato y cumplido se mostraba con ellos, pues sin saber palabra de su lengua ni ellos de la española, se estaba todo el día enseñándoles, y hablando y platicándoles las reglas del canto en romance, tan de propósito y sin pesadumbre, como si ellos fueran meros españoles. Y los muchachos estaban la boca abierta mirándole, y oyéndole muy atentos a ver lo que quería decir.” ... “los muchachos en poco tiempo le entendieron, de tal manera, que no sólo deprendieron y salieron con el canto llano, mas también con el canto de órgano.” (Mendieta. 1971: Lib. IV. Cap. XIV. p. 412) [最初に彼らに歌を教えたのは、ペドロ・デ・ガンテ師と共に、フアン・カロ師という名の尊敬すべき年配の司祭である。彼は、彼らに対し、気安くかつ礼儀正しく接し、彼らのことばを知ることなしに、また彼らがスペイン語を知ることなしに一日中ロマンス語 (スペイン語) で彼らに歌の規則を教え、話し、彼らがあたかもほんとうのスペイン人であるかのように心を込めて嫌がることなく語りかけていた。子供たちは口をあけて彼を見ていて、何が言いたいのかを知ろうと注意深く彼を見ていた。] … [子供たちはしばらくして彼を理解し、そのようにして、単旋律聖歌のみならず、オルガンの聖歌も習得した。]

絶えず熱意と誠実さを持って語りかけることで実技を教えていったようである。

ヘロニモ・デ・メンディエタによると、ペドロ・デ・ガンテは、同僚のスペイン人修道士たちと話すときは、吃音であったとのことである

(Mendieta. 1971: Lib. V. Cap. XVIII. p. 609)⁹⁾。

“Predicaba cuando no habia sacerdote que supiese la lengua de los indios, la cual él supo muy bien, puesto que era naturalmente tartamudo, que por maravilla los frailes le entendian, ni en la lengua mexicana los que la sabian, ni en la propia nuestra. Pero era cosa maravillosa que los indios le entendian en su lengua, como si fuera uno de ellos.” [インディオの言語ができる司祭がない時に、その言語がよくできたので彼が説教をしていた。彼は生まれつき吃音であったので、ナワトル語がわかる修道士がナワトル語によっても、また我々自身の言語であっても、修道士たちが彼の言っていることを理解するのは極めて難しかった。しかし現地の人たちは彼があたかも自分たち仲間の一人であるかのように現地の言語で彼が言っていることが解るのはすばらしいことであった。]

現地の人たちと話をするとき、スムーズにコミュニケーションができているほど、ナワトル語を誰よりもよく使えるようになった。メキシコ市司教に選ばれたフアン・デ・スマラガ師 (Fr. Juan de Zumáraga) は、カルロス1世宛の書簡(1529年8月27日付)で、現地の人たちと話をするのに、ペドロ・デ・ガンテが良い通訳として務めたことを書いている¹⁰⁾。

“con un religioso flamenco, buena lengua, que se dice Fr. Pedro de Gante, les dije” (García Icazbalceta. 1947: p. 222) [ペドロ・デ・ガンテ師という、良き通訳であるフランドルの一人の修道士によって、彼ら(現地の首長や貴族たち)に私は言った]

1532年にフランスのツールーズで開催されたフランシスコ修道会総会(Capítulo General de Tolosa, celebrado en 1532)宛書簡で、スマラガ師はまた、ペドロ・デ・ガンテがナワトル語に長けていたことを書いている。(Torre. 1974: p. 13 nota 12.)

“Entre los frayles que están bien enseñados en la lengua yndica es vno que se llama fray Pedro de gante (*sic*) y es lego, el qual habla aquella lengua facundissima & copiosamente.” (P. Isla によるスペイン語訳¹¹⁾, García Icazbalceta. 1947: p. 306) [現地の言語で最も上達した修道士の中で、ペドロ・デ・ガンテ師と呼ばれる一人がいて助修士である。彼はその言語を大変雄弁にかつ多く話す。]

ナワトル語で内容豊富で長いキリスト教要理も著述し、印刷された(Mendieta. 1971: Lib. IV. Cap. XLIV. p. 550, Lib. V. Cap. XVIII. p. 609) とのこ

とからもナワトル語の能力がすぐれていたことがわかる。

ナワトル語に43歳ごろに初めて接し、吃音というハンディがあったにもかかわらず、当時の同僚宣教師たちの誰よりもナワトル語をうまく習得し得たのはなぜであろうか。またどのような方法で習得したのだろうか。次節で見る12名のフランシスコ会士らの学習方法の他に、これらのことを直接示す文書は、見つけれなかった。ただ、ペドロ・デ・ガンテは、現地の人たちの伝統的文化に眼を向けていた。

先スペイン期のメキシコでは、詩や物語を、絵や文字の書かれた文書をもとにして暗唱するという伝統があった（アコスタ、1972: pp. 274-276、注51、高山1972）。このことは、アロンソ・デ・モリーナの辞書に次のような語が収録されていることからわかる。

“*Amoxtli*. libro de escritura.” [Amoxtli. 本、手稿]

“*Amoxcalli*. libreria, o tienda de papel.” [Amoxcalli. 本屋、または紙の店]

“*Amoxicuilo*. escritor de libros.” [Amoxicuilo. 本の筆者]

“*Amoxpialoyan*. libreria adonde se guardan los libros.” [Amoxpialoyan. 本を保管しておく図書館.]

“*Amoxitua*. n. leer libros, o relatar procesos.” [Amoxitua. n. 本を読む、または出来事を語る]

“*Tlacuilo*. escriuano o pintor.” [Tlacuilo. 書記、または画家]

“*Tlacuilolli*. escritura o pintura.” [Tlacuilolli. 文字・文書、または絵]

ベルナルディーノ・デ・サアグン（Bernardino de Sahagún）の『ヌエバ・エスパーニヤ事物絵史』（*Historia general de las cosas de Nueva España*）にも、メシカ人の歴史を語る部分で、次のようなことが語られている。

“sus sabios o adivinos que se decían *amoxoaque*, que quiere decir hombres entendidos en las pinturas antiguas, los cuales” ... “se tornaron a embarcar y llevaron consigo todas las pinturas que habían traído de los ritos y de los oficios mecánicos.” (Sahagún, Lib. X, Cap. XXIX, 108. 1977: p. 208) [amoxoaque, すなわち古い絵を理解している人という、彼らの賢人たちや占い師たち]、… [彼らは、再び乗船し、持ってきていた祭式と手工芸に関するすべての絵を持って行った]

アステカの絵文書の伝統にのっとり、キリスト教の「主の祈り」（padre nuestro）や「アベマリア」（avemaria）などを書き表した絵文書（catecismo：公教要理）が作成されていた。これらの絵文書には、伝統的

な絵文字も使用されている。例えば数の14は、小さい丸を14個描くことで表し (Sánchez. 2003: p. 234, p. 303)、40は、旗で表していた数字の20 (Peñafiel. 1978: c.v. *Tzompanco*; p. 228, 高山. 1972: p. 540) を二つ描くこと (Sánchez. 2003: p. 235, p. 286) で表している。十字架やイエスキリストを表す文字は、キリスト教のために作られたものと考えられる¹²⁾。絵文書の中にペドロ・デ・ガンテの署名のあるものがある (Sánchez. 2003)。“Catecismo de Fray Pedro de Gante” [ペドロ・デ・ガンテ師の公教要理] と呼ばれる絵文書である。ペドロ・デ・ガンテがこの絵文書の作成にどのように、また、どれほど関わったのかは不明である (Tapia Zúñiga. s/f: p. 32)。しかし、署名があるということは、その内容や使い方について理解していて、キリスト教理の現地の人たちへの教育に使っていた¹³⁾と考えられる。

また、支配者のスペイン人たちに虐げられる現地の人たちの境遇にペドロ・デ・ガンテが深く同情していたこともカルロス1世への1552年2月15日の書簡 (Torre. 1974: pp. 46-55) で読み取れる。

“acaee salir el indio de su pueblo, e no volver allá en un mes, especial porque hay pueblos fuera desta cibdad cantidad de leguas; los cuales son obligados de servir su amo en México, de dalle indios de servicio, y servicio de hierba y leña y zacate e gallinas; e esto como los pobres de los indios lo han de comprar, porque en su pueblo no lo tienen, andan arrastrados y de día y de noche buscándolo, porque la orden que en esto de los servicios se tiene, es que cada día meten en casa del encomendero servicio, e así, lo han de comprar cada día, y desta manera, siempre están fuera de sus casas, y son tan maltratados de la gente, de esclavos, negros e criados de los tales, que en lugar de dalles de comer.” (p. 47) ... “y quedan sus hijos y mujer muriendo de hambre” ... “¡Oh crueldad grande!” (p. 49) [インディオが自分の村を出ることとなり、特に村がこの町 (メキシコ市) から何キロも離れたところにあるので、一か月もそこに帰らないことになる、インディオは、メキシコ市の主人に奉仕することを強いられていて、奉公しなければならず、ハーブ、焚き木、牧草、ニワトリを持ってこなければならない。貧しい (哀れな) インディオたちは、それを買わなければならない、なぜなら村ではそれを持っていないからであり、悲惨にも昼夜それを探しながら歩き回っている。なぜなら、このことの奉公の命令は、エンコメンデロの家に毎日奉仕しなければならないからであり、そのよう

にして毎日それを買わなければならない。このようにしていつも自分の家の外にいる。そして食事を与えられる代わりに、奴隷、黒人、召使に、そのような人たちに虐待されている。] … [そして彼の子供たちや妻は空腹で死にそうになっている] … [なんと残酷なことだ！]

現地の人たちがスペイン人のエンコメンデロに命令され、労働を提供し、物品を納めなければならなかったこと、そのため故郷の家族を離れ、耕作ができないため妻や子が飢えたこと、僅かな謝礼をもらっても自分の飢えを癒すためにも不足だったこと、またスペイン人の命令を伝える者たち(奴隷、黒人、召使)からことばでもって、また物理的にひどい暴力を受けていた(“los maltratan de palabra y de obra malamente” p. 48) ことなどをペドロ・デ・ガンテは、カルロス I 世宛の書簡の中に何度も繰り返して、エンコミエンダ制の弊害などを訴えている¹⁴⁾。このような現地の人たちへの同情、共感があったので、1572年に師が亡くなった時、自分の本当の父親が亡くなったかのように非常に多くの現地の人たちが涙を流し、喪に服した(Mendieta. 1971: Lib. V. Cap. XIX. p. 611. Torre. 1974: p. 69) ということが理解できる。

植民者を相手のミサで、現地人たちを虐げていることを告発する説教を、ドミニコ会士たちを代表してアントン (アントニオ)・モンテシーノ師が、イスパニオラ島 (La Española) のサント・ドミンゴで行ったのは、1511年12月21日¹⁵⁾であり、ラス・カサスが、先住民への不正に気づいた第1回の回心が1514年¹⁶⁾である。フランシスコ会ペドロ・デ・ガンテの先住民擁護の考えは、先駆ではないけれども、ドミニコ会の宣教師たちの主張の流れをくむ¹⁷⁾、あるいは共通したものと考えられる。現地の人たちへの共感とナワトル語上達のどちらが理由でどちらが結果なのかはわからない。

4. 12人の修道士

ペドロ・デ・ガンテら3名の修道士がメキシコに到着してから9か月後に12人のフランシスコ会修道士がやって来た。初期の彼らの宣教の様子をディエゴ・ムニョス・カマルゴ (Diego Muñoz Camargo¹⁸⁾) が記述している。

“Como no sabían la lengua, no decían sino que en el infierno, señalando la parte baja de la tierra con la mano, había fuego, sapos y culebras; y acabando de decir

esto, elevaban los ojos al cielo, diciendo que un solo Dios estaba arriba, asimismo apuntando con la mano, lo cual decían siempre en los mercados y donde había junta y congregación de gentes, y no sabían decir otras palabras que los naturales les entendiesen sino era por señas” (*Historia de Tlaxcala*. Libro I. Capítulo XX) [ことばがわからなかったので、手で地面の下の部分を示し、地獄には火とカエルとヘビがいると言い、これを言い終わると、両目を空に向けて、上には唯一の神がいると、同じように手で指し示し、言っていた。このことを、市場や人びとの集まる所ではいつも言っていた。現地の人たちが理解できる他のことばを言うことはできず、身振りによってのみであった。]

また、修道士たちの一人で、高齢で禿げた一人 (*un venerable viejo calvo*) が、太陽が昼間照りつける中でこのように熱心に信仰を説き、「改宗するように、偶像崇拝をやめるように」と夜中に非常に大きな声で言っていたと記述されている。こうした修道士たちに対して、現地の人たちの首長たちが同情し、空腹なら食べ物を与えるようにと言い、また彼らは大きな病に犯されているから、叫ぶがままにし、危害を加えてはならないなどと言っていたと書かれているので、キリスト教の教義が的確に理解されたわけではなかったと考えられる。

首長や貴族の子供たちをあずかって、キリスト教の教育を始めたが、ことばが使えなくてうまくいかなかった。修道士たちは現地の言語を学ぼうと努力をしたけれど、最初はことばを交わすことすら難しかったようである：

“no sabían qué se hacer, porque aunque deseaban y procuraban de aprender la lengua, no había quien se la enseñase. Y los indios con la mucha reverencia que les tenían, no les osaban hablar palabra.” (Mendieta. 1971: Lib. III. Cap. XVI. p. 219) [彼ら(修道士たち)はどうしたらいいかわからなかった、なぜならことばを学びたく、学ぼうとしたけれども、それを彼らに教えてくれる人がいなかった。そしてインディオたちは、彼らに大いに敬意を抱いていたので、ことばをかけようとはしなかった]

“púsoles el Señor en corazon que con los niños que tenían por discípulos se volviesen también niños como ellos para participar de su lengua” ... “Y así fué, que dejando á ratos la gravedad de sus personas se ponían á jugar con ellos con pajuelas ó pedrezuelas el rato que les daban de huelga, para quitarles el empacho

con la comunicacion. Y traian siempre papel y tinta en las manos, y en oyendo el vocablo al indio, escribíanlo, y al propósito que lo dijo. Y á la tarde juntábanse los religiosos y comunicaban los unos á los otros sus escritos, y lo mejor que podian conformaban á aquellos vocablos el romance que les parecia mas convenir. Y acontecíales que lo que hoy les parecia habian entendido, mañana les parecia no ser así.” (Mendieta. 1971: Lib. III. Cap. XVI. pp. 219–220.) [主は、弟子としていた子供たちと一緒に、彼らのことばを共に持てるように、心において彼らもまた子供たちのように戻した。] … [そしてそのようにして、時々自分たちの性格のまじめさをやめて、休みをもらったしばらくの間、コミュニケーションすることへの壁を取り除くために、彼ら（子供たち）とわらや小石で遊んだ。そしていつも紙と墨を手を持ち、インディオから語を聞くと、言われるたびにそれを書いた。夕方には聖職者たちは集まり書いたものをお互いに話し合い、できるだけその語に適したロマンス語（スペイン語）を確認していった。今日理解できたように思ったものも、明日にはそうでなかった。]

心を子供の無邪気さに戻し、子供たちと一緒に遊び、その間、ノートと筆記具をいつもたずさえて耳にした語を書きとめ、後で、書きとめたものの語形と意味を仲間同士で照合して正確を期したということである。正確を期すのに、現代では辞書や文法書が利用できることは異なるものの、絶えず耳をそばだて新しい語や語句を書きとめ、覚えていく作業は現代の外国語学習に通じる。こういった学習を続けるうちに、インフォーマントである現地の人たちの子供たちが協力的になった。

“Y ya que por algunos dias fueron probados en este trabajo, quiso Nuestro Señor consolar á sus siervos por dos vias. La una, que algunos de los niños mayorcillos les vinieron á entender bien lo que decian; y como vieron el deseo que los frailes tenian de deprender su lengua, no solo les enmendaban lo que erraban, mas tambien les hacian muchas preguntas, que fué sumo contento para ellos.” (p. 220.) [そして何日かこの仕事を試みたところ、我らの主が二つの方法で神のしもべの苦しみを和らげようとなさった。一つは、少し年長の子供の何人かは彼らが言っていることを良く理解するようになった。そして修道士たちが彼らのことばを習得したがっているということを見て、彼らの間違いを正すのみならず、多くの質問をしたものだった。このことが彼らにはきわめて満足なことであった。]

修道士たちが覚えて使ったことばを子供たちがある程度理解することができ、間違った言い方を正したり、子供たちの方から質問をして理解を確認することによって、修道士たちの語学力を確実なものとするよう協力したことがわかる。また現地の人たちとの付き合いでナワトル語を習得していたスペイン人の子供の協力も得ることができた。

“El segundo remedio que les dió el Señor, fué que una mujer española y viuda tenia dos hijos chiquitos, los cuales tratando con los indios habian deprendido su lengua y la hablaban bien.” (p. 220) [主が与えられた第2の方法は、一人のスペイン人寡婦に小さい二人の子供がいて、子供たちはインディオたちとつきあうことでその言語を習い覚え、上手に話すようになっていた。]

ナワトル語を習得していたスペイン人の子供の一人を彼らのところに寄こすようコルテスに頼み、母親が快諾したので、その子供は宣教師たちと一緒に生活するようになった。

“Tenia su celda con los frailes, comia con ellos y leiales á la mesa, y en todo iba siguiendo sus pisadas. Este fué el primero que sirviendo de intérprete á los frailes dio á entender á los inidios los misterios de nuestra fe, y fué maestro de los predicadores del Evangelio, porque él les enseñó la lengua, llevándolo de un pueblo á otro donde moraban los religiosos, porque todos participasen de su ayuda.” (p. 220) [彼は神父たちと同じく個室を持ち、修道士たちと食事をして食卓で朗読をした。そして何事においても修道士のまねをしていた。彼が修道士たちの最初の通訳で我等の信仰の玄義をインディオたちに解らせた。また彼は宣教師たちの教師であった。というのは言語(ナワトル語)を教えたからである。修道士が住んでいる村から村へ、彼を連れて行った。皆が彼の助けを共にしていたからである]

彼が後のアロンソ・デ・モリーナ師である。

5. アロンソ・デ・モリーナ師

アロンソ・デ・モリーナは、ナワトル語の辞書や文法書、ナワトル語でのキリスト教の教義や告解の書をいくつか残している。ヘロニモ・デ・メンディエタによるメキシコ在住のフランシスコ会士名簿原稿(1570年11月20日の日付)に、アロンソ・デ・モリーナは、“es la mejor lengua mexicana de aquella tierra maiormente para el uso de la predicacion y para tratar

con los yndios” [宣教とインディオとの付き合いのためにかの地でのナワトル語の最も優れた通訳である]との言語能力の記載がある。年齢が60歳とあるので生まれた年は、1510年ごろである (Assadourian. 1988: p. 390)。León-Portilla (1970: XX-XXIV) は、アロンソ・デ・モリーナの生誕地や生まれた年月についての確実な情報はないものの、フランシスコ会の記録編纂者フランシスコ・アントニオ・デ・ラ・ロサ・フィゲルオア師 (fray Francisco Antonio de la Rosa Figueroa) の1770年頃の記録などに基づき、スペインのエクストゥレマドゥーラ地方のどこかで1513年か1514年に生まれ、1522年か1523年にメキシコに来たと推定している。León-Portilla (1984: p. 317) では、メキシコに来たのが1523年か1524年としている。1510年生まれとすると、12歳から14歳の時、1514年生まれとすると8歳から10歳の時にメキシコに来たことになる。メンディエタの『インディアス教会史』の中の“hijos chiquitos” (小さい息子たち) という表現からは、8歳から9歳を想像したくなるが、はっきりとした年齢はわからない。

しかしたとえ8歳からの現地の人たちとの付き合いによってナワトル語を習い覚えたのであっても、母語もしくは第一言語として習得したわけではない。アロンソ・デ・モリーナもそのことを書いている：

“Algunas dificultades que se me han ofrecido, ansido causa que antes de agora no aya puesto mano en esta obra. Lo primero y principal, por no auer mamado esta lengua con la leche, ni ser me natural: sino auerla aprêdido por vn poco de vso y exercicio, y este no del todo, puede descubrir los secretos que ayêla lengua, la qual es tan copiosa, tan elegante, y de tanto artificio y primor en sus metaphoras y maneras de dezir, quanto conoceran los que en ella se exercitaren.” (Molina. 1571: Prólogo al Lector) [いくつかの困難があり、そのため今までこの著作に手をつけることができなかった。その主たる理由は、母乳とともにこの言語を習得したのではなく、自分にとっての本来のことばではなく、少しばかりのその使用と練習で習ったものだからである。それだけではなく、かくも豊富で、かくも優雅で、習得すればするほど、比喩と表現法において、精巧で繊細なこのことばが持つ極意を見出すことができるからである。]

アロンソ・デ・モリーナの書いていることは、ナワトル語にことば使いのレベルの違いがあることと関係していると考えられる。民衆層のことば使いと、洗練された教養ある階層のことば使いである。

5.1. 民衆層のナワトル語と洗練されたナワトル語

ベルナルディーノ・デ・サアグン (Bernardino de Sahagún) の『ヌエバ・エスパーニャ事物総史』(Historia general de las cosas de Nueva España) に、征服以前の文化の記述で、貴族の子弟などが学んだ神官になるための学校カルメカク (Calmécac) での教育について書かれていて、その中に、ことばについて、次のような記述がある：

“La décimatercera era que les mostraban a los muchachos (a) hablar bien y saludar, y hacer reverencia” “La décimacuarta era, que les enseñaban todos los versos de canto, para cantar, que se llamaban divinos cantos, los cuales versos estaban escritos en sus libros por caracteres; y más les enseñaban la astrología indiana, y las interpretaciones de los sueños y la cuenta de los años.” (Apéndice del Libro III. Capitulo VIII. Sahagún. 1977: pp. 306–307) [13番目は、子供たちにうまく話すこと、挨拶すること、敬意を表すことを、教示していた] … [14番目は、歌うために、すべての歌の詩句を教えていた、これらは神の歌と呼ばれていて、その詩句は、文字で書物に書かれていた。またさらに現地の人たちの占星術と、夢の解釈と年の数え方を教えていた]

支配階級の子供たちは、カルメカクにおいて、詩歌とともに、洗練された話し方も学んでいたことがわかる。先に見た、絵文書による詩歌や物語の暗唱もこのカルメカクにおける教育に含まれていた。

イエズス会のイグナシオ・デ・パレデス師 (Ignacio de Paredes) により1759年に公刊された同会のオラシオ・カローチ師 (Horacio Carochi) のナワトル語文法 (*Arte de la lengua mexicana*) の改訂版 (Paredes. 1979) には、ナワトル語を完璧に話すためには、使役動詞 (verbos compulsivos)、応用動詞 (他人のために行われる動作であることを示す、verbos aplicativos)、敬語動詞 (verbos reverenciales) を、特に勉強するようにと勧め、そうでないと、このことばができる人や現地の人たちの笑いを誘い、次のように言われるとしている。

“*Inin teopixqui âmo quimomachitia in huel tetlàtol, in mexicana tecpillâtolli, çan in macehuallâtolli*: este Padre no sabe el proprio, y pulido mexicano sino solamente el de los Macehuales, ô plebeyos.” (Paredes. 1759: Lib. 3º, Cap. 3º; p. 93)¹⁹⁾ [この神父は、本来の、洗練されたメキシコ語を知らずに、民衆の庶民のことばを知っているだけである]

モリーナの辞書に、動詞 “Hablar. *ni, tlatoa*” [話す] の名詞形として、“Habla.

tlatolli.” [ことば、話すこと] があるので、“*macehuallâtolli*” は、動詞 “*Maceuallatoa. ni. hablar rústicamente.*” [粗野に話す] の名詞形で、民衆層のナワトル語のこと、“*tecpillâtolli*” は、“*Tecpillatolli. habla, o razonamiento cortés y elegante.*” [礼儀正しく丁寧なことばあるいは論法] の項目があり、洗練された教養ある階層のナワトル語を意味する。動詞は、“*Tecpillatoa. ni. hablar cortés y curiosamente.*” [礼儀正しく、丁寧に話す] である。それぞれ、“*Maceualli. vasallo.*” [臣下、臣民] と “*Pilli. cauallero, o noble persona.*” [紳士、高貴な人] の語彙要素が含まれている。

「私は家を建てる」や「私はお金を取る」ということを表現するのに、動作主と動作、それに直接目的語だけを表現するときの動詞に、誰かのため、あるいは誰かからその動作をするときには、動詞に *-lia* という接尾辞を付けるのが応用動詞である：

“*Nicchihua cē calli*” [私は一軒の家を建てる]

“*Nicchiuhilia cē calli*” [私は彼に一軒の家を建てる]

“*Niccuí in tomin*” [私はお金を取る]

“*Nimitzcūilia in tomin*” [私はあなたからお金を取る] (「あなた」は2人称目的格接辞の *-mitz-* で表現されている)

(例文は、Launey. 2011: p. 202)

同じ事柄を表現するのに、「誰かのため」という意味あいがあるときにこの応用動詞の形にする。同じ事柄を表現する場合でも、敬意を表す敬語を使う場合とそうでない場合とがある。これらの区別を習得して使い分けられることができるかどうか、洗練されたことば使いをできるかどうかの違いのようである。

León Portilla (1970: XXXIII) によると、アロンソ・デ・モリーナによる『ナワトル語スペイン語による小告解集』(Confessionario breve, en lengua mexicana y castellana) の第2版 (1569) の奥付に *neyolmelahualonii* と書かれているとのことである。これは、罪を犯した心を純化するという先スペイン期の古い儀式を意味する *neyolmelahualiztli* に *-loni* の語尾 (道具の概念を付与) が付けられた語とのことである。アロンソ・デ・モリーナは、先スペイン期の古い儀式の名前も知り、この語をキリスト教の告解の意味で書に使ったのである。

アロンソ・デ・モリーナは、ナワトル語母語話者との付き合いで日常生活に使う話しことばのナワトル語を習い覚えただけでなく、その後も教養

あるナワトル語を学び続けた。トラテロルコ十字架学院 (Colegio de Santa Cruz de Tlatelolco) で共に生活をしてきたテスココ人のエルナンド・デ・リーバス (Hernando de Rivas) からナワトル語の深い知識を獲得した (Hernández de León-Portilla. 2009: p. 170) と考えられている。

5.2. 聖職者としてのヨーロッパ伝統の教育

ナワトル語の辞書や文法書を見ると、宣教師としてのヨーロッパの教育も受けていることがわかる。辞書には、ネブリハのラテン語とスペイン語との対訳辞書の形式に範をとったことが書かれている。

“el romance de los verbos se pondra en el infinitiuo, como lo pone Antonio de Lebrixa en su vocabulario.” (Cas.-Mex. Aviso tercero) [スペイン語の動詞は、アントニオ・デ・ネブリハがそうしたように、不定詞形を掲げるだろう]

“el otro Vocabulario que començasse en la lengua Mexicana, conforme al proceder del Antonio de Lebrixa, no seria de menos vtilidad que el que comiença en nuestro romance” (Mex.-Cas. Prologo.) [アントニオ・デ・ネブリハが先行したのにあわせた、ナワトル語で始まるようなもうひとつの語彙集は、スペイン語で始まるものに比べても劣らず有用であろう]

Hernández de León-Portilla (2009: pp. 171-173) によると、アロンソ・デ・モリーナのナワトル語文法書 (*Arte de la lengua mexicana y castellana*, 1571) は、ネブリハのラテン語文法、ドナトゥス (Elio Donato) のラテン語文法 (*Ars Maior*)、クインティリアヌスの (Marco Fabio Quintiliano) 『弁論家の教育』 (*De Institutione oratoria*)、ニコラウス・クレナルドゥス (Nicolavs Clenardus) のヘブライ語文法 (*Tabvla in grammaticen hebraeam*) に範をとっていて、これらの書物は、当時のトラテロルコ十字架学院の図書館に所蔵されていたとのことである。この学院は、ラテン語による教養を身につけキリスト教聖書を理解して信仰を根付かせた現地の人たちの指導者を養成し、その後、現地の人たち大衆を宣教するために、ことばを知らない聖職者を助けることができるようにと1536年1月6日に正式に開校された (Kobayashi. 1974: p. 295, p. 298)。Kobayashi (1974: p. 308) は、ナワトル語を習得したモリーナもこの学院で教育にたずさわったと考えることは自然であろうと述べている。ナワトル語の文法書執筆にラテン語やヘブライ語の文法書を参照していることから、モリーナ自身もこの学院で行われているようなラテン語による教養や聖書の教育を受けたものと考えられ

る。

6. おわりに

ナワトル語を習得し始めたのが43歳ごろという年齢になってから、スペイン語も42歳ごろから学習し始め、しかも吃音というハンディがあったペドロ・デ・ガンテの学習方法を示す文書は見つけられなかった。しかし現地の人たちの伝統文化を尊重し、現地の人たちの虐げられた境遇に同情し、思い入れがあったことがうかがえる。12名の修道士たちは、子供たちと無邪気に遊ぶ時間を作り、遊んでいる間、いつも筆記具を持ち、耳にした語や表現を書きとめ、覚えようとしていた。アロンソ・デ・モリーナは、9歳から14歳ごろから現地の人たちと付き合い合うことでナワトル語を習得し、その上、洗練されたナワトル語の学習を続け、ラテン語やヘブライ語などの当時のヨーロッパの聖職者の教養としての外国語学習や研究を続けた。アロンソ・デ・モリーナの外国語学習の場合は、子供時代に、耳にして覚えた言語であっても、その後の学習を継続する必要があることを示していると考えられる。

ヘロニモ・デ・メンディエタによるフランシスコ会士名簿原稿（1570年11月20日の日付）には、この時点でメキシコ在住だけでも司祭（sacerdotes）が161名、まだ司祭職でない者（aun no son de misa）で16名、助修士（frailes legos）に26名の名があがっている。この中のほんの少数の修道士の言語学習の記録を見ただけではあるが、これら宣教師たちは、故郷や生まれた地を離れたメキシコで、現代における外国語学習の心構えや方法と違いのない努力をして現地の言語を習得したことがわかった。

謝辞

本稿は、2014（平成26）年度学長特別教員研究費「大航海時代の戦国日本—イベリア世界との接触から照射される前近代的自我形成の磁場」（研究代表者：川畑博昭）による研究の一部である。

いくつかの刺激と知見をいただいた大航海時代研究会メンバーに感謝します。

注

- 1) 外国語文引用の後ろの「 」の中には引用による和訳で、[]の中には拙訳を示す。また引用文中の [] の中および下線は、筆者による。
母語と異なる言語を学習することを本稿で「外国語学習」と呼ぶことにする。
- 2) ナワトル語部分の和訳は省略する。
- 3) 「現在のベルギー西部とフランス北部、オランダ南西部にわたる地域」(池上他 2004: フランドルの項)
- 4) Kobayashi (1974: 186). フランシスコ会士たちのフランドル語名は、Torre (1974: 1), Verlinden (1986: 108) による。1552年2月15日ペドロ・デ・ガンテ師書簡 (Torre. 1974: 46) など。
- 5) Torre (1974: 8) が生年を1476から1483年の間と推定し、Verlinden (1986: 105) は、Robert Ricard (1933) *La conquête spirituelle du Mexique*. (西語訳1947、英語訳1966) の1480年頃という説を採用している。Torre (1974: 9. nota 9) では、*Códice Franciscano* のこの文書を1570年のものとしている。
- 6) Alvar (1997) によると、カルロス I 世は、フランドルの宮廷では、フランス語を話していて、カスティリヤ語もドイツ語も、またフランドル語も話さなかった (p. 169)。聴罪司祭がフランス人 (Jean Glapion) だったのが、1522年にスペイン人 (Francisco de Quiñones) となり、以後、最後までスペイン人 (García de Loaysa など) が務めたことから、1522年頃からスペイン語が他の言語より自由に使えるようになったとしている (p. 173)。1500年生まれなので、22歳頃である。
- 7) 1529年6月27日付 (Torre. 1974: 40, Verlinden. 1986: 106)。
- 8) ペドロ・デ・ガンテの1529年付フランドルの神父・修道士宛書簡はスペイン語からのラテン語訳が残っている。カルロス 5 世皇帝宛 3 通、フェリペ 2 世宛 1 通は、スペイン語で書かれている。
- 9) 「ヘロニモ・デ・メンディエタによるペドロ・デ・ガンテ師の伝記」(Torre. 1974: 67)、Kobayashi (1974: 233. nota 205)
- 10) Kobayashi (1974: 233 nota. 205)
- 11) García Icazbalceta (1947: 300-308) に収録されているラテン語の版 2 種とスペイン語訳 2 種から、スペイン語訳 1 種のみを引用した。
- 12) Sánchez (2003: Anejo I) に、絵文字要素の一覧が掲げられている。enemigo (敵) を conquistador ([スペイン人] 征服者) で表している (Sánchez. 2003: p. 236, p. 249) ことから、書き手はインディオであること、あるいはインディオが加わっていたと推測できる。
- 13) Kobayashi (1974: pp. 198-199) には、pintura (絵) が、音楽と舞踊と並んで、

- キリスト教の普及に有効であり、18世紀まで用いられていたことが述べられている。またこのような絵文書が複数残っていることから、これらは、キリスト教要理を伝えるのに有効であったと考えられる。Sanchez (2003) は、マドリード、メキシコ、パリなどに保存されている5種を扱っている。拙著の堀田 (2011: 82) の上から9行目「しかし絵文字文書では一神教をうまく教えることができないと」を「絵文字文書での教育に加えて」と訂正する。
- 14) 他に、鉱山で奴隷労働を強いられること、現地の人たち同士の訴訟で財産を失うことなどが書かれている。
- 15) <http://www.op.org/es/content/502-anos-luchando-por-la-justicia> および、ラス・カサス (1990: 147-170)。
- 16) 大貫他2013:「ラス・カサス」の項
- 17) 1517年に現地の人たち救済を請願しに来ていたラス・カサスがスペインのサラゴース市に滞在していた時、師の話聞きに来て、師の主張に共感した「モシオール・デ・ラ・ムーレ [ムッシュー・ド・ラ・ミュール]」(この[]は、引用のまま。ラス・カサス.5. p. 228) (Mosior de La Mure) というフランドル人廷臣がいる (Casas: Lib. III. Cap. CIV. p. 391)。このフランドル人が後のペドロ・デ・ガンテ (Pedro de Mura; Peter Van der Moere, de Moor, o de Muer) という説がある。しかしこれを証明する文書はないようである (Giménez Fernández. 1984: p. 207 nota. 666.)。セビリャ出身のラス・カサスは、セビリャとブルッヘ (*Brugge*, 現ベルギー) との商業上の交流から、カルロス I 世のフランドル人廷臣と懇意となったとのことである (Gil. 1999)。
- 18) Bandelier (1908) によると、ディエゴ・ムニョス・カマルゴは、1521年直後にスペイン人の父と先住民の母から生まれ、フランシスコ会修道士たちから教育を受け、主としてトラスカラ人の伝統文化を調べ、通訳を務めていた。
- 19) Siméon (1965, 1977: c.v. *tecpillatolli*) にも引用がある。ただし出典が (Car.) [= Carochi 1645] とあるが、(Par.) [= Paredes 1759] とあるべきである。Ignacio de Paredes による加筆部分である。

引用文献

- アコスタ、『新大陸自然文化史(下)』。増田義郎訳、岩波書店、大航海時代叢書：4 (第1次1966), 第2次, 1972。
- 池上岑夫他監修、『スペイン・ポルトガルを知る事典』。新訂増補, 平凡社, (第1刷, 2001), 第2刷, 2004。
- 大貫良夫他監修、『ラテン・アメリカを知る事典』。平凡社, 新版, 2013。
- 高山智博, 「アステカの文字」, アコスタ (1972) 所収, pp. 539-543。
- ディーアス・デル・カステイリョ, ベルナルル, 『メキシコ征服記 I』。小林

- 一宏訳. 岩波書店, 大航海時代叢書エクストラ・シリーズ: 3, 1986.
- 堀田英夫. 『スペイン語圏の形成と多様性』. 朝日出版社. 2011.
- ラス・カサス. 『インディアス史 四』. 長南実, 増田義郎 [訳], 大航海時代叢書 (第II期) 24, 岩波書店. 1990.
- ラス・カサス. 『インディアス史 五』. 長南実, 増田義郎 [訳], 大航海時代叢書 (第II期) 25, 岩波書店. 1992.
- Alvar, Manuel. “Carlos V y la lengua española” (En: Nebrija y estudios sobre la Edad de Oro. Madrid, C.S.I.C., 1997, pp. 169–188)
http://www.cervantesvirtual.com/bib/historia/CarlosV/8_3_alvar.shtml
http://books.google.co.jp/books?id=3RSiQyurDV8C&ie=ISO-8859-1&source=gbs_ViewAPI&redir_esc=y
- Assadourian, Carlos Sempat. “Memoriales de fray Gerónimo de Mendieta”, *Historia Mexicana*, v.37, 1988. pp. 357–422.
- Bandelier, Adolph Francis. “Diego Muñoz Camargo.” The Catholic Encyclopedia. Vol. 3. New York: Robert Appleton Company, 1908.
<http://www.newadvent.org/cathen/03209a.htm> 2014/09/15
- Carochi, Horacio. *Arte de la lengua mexicana: con la de declaración de los adverbios della*. edición facsimilar de la publicada por Juan Ruyz en la Ciudad de México, 1645, 1a ed. con un estudio introductorio de Miguel León-Portilla. Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de Investigaciones Filológicas, 1983.
- Casas, Fray Bartolomé de las. *Historia de las Indias*. selección, edición y notas de José Miguel Martínez Torrejón, Alicante: Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes, 2006.
http://www.cervantesvirtual.com/obra-visor/historia-de-las-indias--0/html/d31cc52d-acd9-4776-a069-ee37b963f399_12.html
- Códice Franciscano: siglo XVI: Informe de la Provincia del Santo Evangelio al visitador Lic. Juan de Ovando, Informe de la Provincia de Guadalajara al mismo, Cartas de religiosos, 1533–1569*. Nueva colección de documentos para la historia de México, Publicada por Joaquín García Icazbalceta. II, México. 1889.
<http://cdigital.dgb.uanl.mx/la/1080023992/1080023992.PDF>
- Díaz del Castillo, Bernal. *Historia de la conquista de Nueva España*. Introducción y notas de Joaquín Ramírez Cabañas, 8ª ed., México, Editorial Porrúa. 1970.
- García Icazbalceta, Joaquín. *Don fray Juan de Zumárraga, primer obispo y arzobispo de México*, tomo 2. Ed. de Rafael Aguayo Spencer y Antonio Castro Leal.. Porrúa, 1947 (Colección de escritores mexicanos: 42).
- Gil Fernández, Juan. “Bartolomé de las Casas y los cortesanos flamencos”. *Mar Océana. Revista del Humanismo Español e Iberoamericano*. 3. 1999. 79–87, 6 Ref.
<http://ddfv.ufv.es/bitstream/handle/10641/652/Bartolom%c3%a9%20de%20las%20>

- Casas%20y%20los%20cortezanos%20flamencos.pdf?sequence=1
- Giménez Fernández, Manuel. *Bartolomé de las Casas tomo 2: Política inicial de Carlos I en Indias*. Madrid, Editorial CSIC, 1984. (Sevilla, 1960).
<http://books.google.co.jp/books?id=C9fQwKIyR9EC&printsec=frontcover&hl=ja#v=onepage&q&f=false>
- Hernández de León Portilla, Ascensión. “El Arte de la lengua mexicana y castellana de fray Alonso de Molina: Morfología y composición”. *Estudios de Cultura Náhuatl*, 39, 2009. pp. 167–206.
<http://www.ejournal.unam.mx/ecn/ecnahuatl39/ECN039000008.pdf>
- Kobayashi, José María. *La educación como conquista*. México, Colegio de México. 1974.
- Launey, Michel. *An Introduction to Classical Nahuatl*. Translated and adapted by Christopher Mackay, Cambridge, Cambridge University Press, 2011.
- León-Portilla, Miguel. *Estudio preliminar*. en Fray Alonso de Molina. *Vocabulario en lengua castellana y mexicana y mexicana y castellana*. 4. ed. Porrúa, 1970. pp. XIII–LXIV.
- León-Portilla, Miguel. Los franciscanos vistos por el hombre náhuatl. Testimonios indígenas del siglo XVI. *Estudios de cultura Náhuatl*, No. 17, 1984.
<http://www.historicas.unam.mx/publicaciones/revistas/nahuatl/pdf/ecn17/276.pdf>
- Mendieta, Fray Gerónimo de. *Historia eclesiástica indiana*; obra escrita a fines del siglo XVI. 2. ed. facsimilar, y primera con la reproducción de los dibujos originales del códice. (1870) (Biblioteca Porrúa: 46) Porrúa, 1971.
- Molina, fray Alonso de. *Vocabulario en lengua castellana y mexicana y mexicana y castellana*. (1ª ed. México, 1571), 4. ed. México, Porrúa, 1970.
- Molina, fray Alonso de. *Arte de la lengua mexicana y castellana*. Obra impresa en México, por Pedro Ocharte, en 1571, y ahora reproducida en facsímil de original, facilitado por D. Antonio Graiño. Ediciones Cultura Hispánica, 1945.
- Muñoz Camargo, Diego. *Historia de Tlaxcala*. publicada y anotada por Alfredo Chavero, Alicante: Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes, 2007. (Publicación original: México, Oficina Tip. de la Secretaría de Fomento, 1892. Obra digitalizada por Unidixital en la Biblioteca América de la Universidad de Santiago de Compostela. Edición digital de la de México, Oficina Tip. de la Secretaría de Fomento, 1892.) <http://www.cervantesvirtual.com/nd/ark:/59851/bmcd7977>
- Paredes, Ignacio de. *Compendio del arte de la lengua mexicana del P. Horacio Carochi de la Compañía de Jesús - dispuesto con brevedad, claridad y propiedad*. (México, Imprenta de la Biblioteca Mexicana, 1759). Edición facsimilar, Editorial Innovación. 1979.

- Peñafiel, Antonio. *Nombre geográficos de México*. Edición, introducción, topónimos e iconografía por César Macazaga Ordoño, con un suplemento facsimilar de los nombres de lugar, escrito en 1885 por Antonio Peñafiel. México, Editorial Innovación. 1978.
- Sahagún, Bernardino de. *Historia general de las cosas de Nueva España*. 3ª. éd. con numeración, anotaciones y apéndices, Ángel María Garibay K. tomos I-IV. Porrúa, 1977.
- Sánchez Valenzuela, Gloria Martha. *La imagen como método de evangelización en la Nueva España: los catecismos pictográficos del siglo XVI: fuentes del conocimiento para el restaurador*. Memoria para optar al grado de doctor, Universidad Complutense de Madrid. Madrid. 2003.
- Siméon, Rémi. *Dictionnaire de la langue nahuatl ou mexicaine*. preface par Jacqueline de Durand-Forest, Graz (Austria), Akademische Druck- U. Verlagsanstalt, 1965.
- Siméon, Rémi. *Diccionario de la lengua náhuatl o mexicana*. traducción de Josefina Oliva de Coll, México, Siglo XXI editores, S.A., 1977.
- Tapia Zúñiga, Pedro C. “Traducción pictográfica”. Chicomoztoc. 3. s/f.
http://www.descolonizacion.unam.mx/pdf/Ch3_3_Traduccion.pdf
- Torre Villar, Ernesto de la. “Fray Pedro de Gante, maestro y civilizador de América”, *Estudios de Historia Novohispana*, 5, 1974. 9–77. <http://www.historicas.unam.mx/publicaciones/revistas/novohispana/pdf/novo05/0047.PDF>
- Verlinden, Charles. “Fray Pedro de Gante y su época”. *Revista de Historia de América*. 101, 1986, pp. 105–131.

Aprendizaje de lenguas extranjeras en la Era de los Descubrimientos —el caso de los misioneros franciscanos en México—

HOTTA Hideo

En la Era de los Descubrimientos los misioneros atravesaron los océanos y se abnegaron en su labor de predicar la fe cristiana a los naturales. Para la predicación tenían que usar las lenguas que se hablaban en esas tierras.

Hemos confirmado en los documentos de esa época cómo algunos franciscanos aprendieron la lengua de los naturales: fray Pedro de Gante empezó a aprender español y náhuatl cuando tenía 42 o 43 años y adquirió las destrezas suficientes de la lengua de los mexicas a pesar de su tartamudez en contraste con sus colegas, teniendo además gran compasión por la situación de los naturales. “Los doce apóstoles de Nueva España” siempre estaban apuntando las palabras que escuchaban y posteriormente confirmaban sus notas entre ellos. Fray Alonso de Molina, adquirió el náhuatl coloquial de joven, pero después de haber empezado a formarse con los frailes franciscanos estudió el náhuatl refinado y las gramáticas latina y hebraica también.

Así hemos visto que se necesitan para el aprendizaje de la lengua la compasión por los hablantes, el continuo esfuerzo de apuntar y confirmar las notas, y la continuación en el estudio de los estilos científico o académico de la lengua, aunque uno haya adquirido la lengua cotidiana cuando era joven.